

思  
考  
の  
偶  
景

精神科医の介入を必要とした病歴と、AV女優たちのライフ・ストーリーとは、俄に同列には論じえまい。自己の過去を語る行為は、たしかに新たな自己確立の契機をなしている。だが条件の整わないなかで安易に外傷を目覚めさせる危険とも裏腹だ。告白は両刃の刃たる両義性を帯びている。さらに、治療者と被治療者との不均衡な力関係が、外傷の反復と転移、さらには、その治療者自身への逆転移を伝染させる危険も、治療的関係の急所となる。永沢の「語り」が含む再構成や加工を、治療記録と同一視するのも危険だろう。だがこうした留保条件をハーマンの本に沿って吟味するに従って、かえって永沢光雄のインタビューの真価が、具体的に浮かび上がってくる。

危険水域内操業は十分承知のうえで、最後に付け加えたい。日本語訳書後書きには、慎重な言葉を選んで記述してあるが、ハーマンの著作は、北米でおおきな論争をよんだ。PTSDという包括的概念の認知そのものが、政治闘争の様相を呈してきた。ことは、医療学会内部の学説上のクーデタだけではなく、帰還兵の医療保障の根幹に及びかねない。さらに英語版後書き(1997)にハーマンも記すとおり、とりわけ家庭内性暴力の告訴に関与した医師は、自分自身が告訴され兼ねぬ。患者に「虐待の事実」を信じ込ませ、告訴を教唆した容疑である。彼女のキータムのひとつ、empowermentには、訳者も苦心しているが、その目指すところは、あきらかに、訴訟社会の法廷で、証言に立つだけの自己確信を被害者に与える、にある。「アドレナリンが沸々と血管内に溢れる」感覚が言及される。ここに至って「回復」という概念の社会的、文化的な偏差が改めて問題となる。真宗などでの自己修養や、森田療法での治癒過程とは、社会との和解——ハーマンは共世界Commonalityと呼ぶ——の在り方が、いかにも様相を異にしている。それは果たして日本社会で、弱者の発言権が、なお未発達である証拠に過ぎないのか。ここに『AV女優』から逆に『心的外傷と回復』を読み直す余地も開けてくる。

連載  
「治癒の書」としての『AV女優』  
永沢光雄のベスト・セラ―とジュディス・ハーマンの『心的外傷と回復』の相互照射

永沢光雄『AV女優』は「治癒の書物」だ。そう得心がいったのは、パデュエ大学での「日本文学における恋愛と性」の基調講演の折り。それも当日の朝、準備の最中に閃いた。癒し、という言葉は、永沢のAV女優へのインタビュー集には見られない。むしろそれは、本書に寄せられた60を越す書評(出版元、ビレッジセンター-homepageでアクセス可能)を瀧過した末に抽出されてきた考え——liminality——だ。「自分の傷ついた部分をさらけだし、光をあてることによって癒してゆく」「汚点として残った性を憎むのではなく、むしろ進んで性によって癒されようとしている」。作家、稲葉真弓氏のそんな言葉が導きの糸となった。「幼いときに親たちに壊された生を、AVという緊急避難所であらうじて繕ったひともある」(鷗田清一)。

元来アナルト・ヴィデオ情報誌の余白に、男性読者の覗き見的好奇心を満たすために掲載されたに過ぎなかったはずの記事。「AV女優の実像に迫るといこの企画それ自体が」、「実は男の自分勝手な欲望におもねった〈告白ゲーム〉」に他ならない(森岡正博)。だが570頁を越す大冊にまとめられた42人のライフ・ストーリーは、元来の企画の限界を突き破る射程を秘めていたようだ。

奇しくも本書がベスト・セラ―となった1996年は、日本社会が住専スキャンダル、阪神淡路大震災、さらにはサリン・ガス事件からの癒しを求めている時期に重なる。外傷後ストレス障害(PTSD)に関する体系的な研究書たるジュディス・ハーマンの『心的外傷と回復』が邦訳されたのは、『AV女優』の半年後。訳者、中井久夫氏が阪神淡路大震災後の「心のケアセンター」の責任者として活躍されたことは広く知られる。その中井氏にとっての、いわば写経の書、の著者ハーマン自身は、すでに父と娘の近親相姦に関する研究書も公刊していた。内田春菊症候群として、可視の形に浮上してきた問題群のなかで、両者は切り結ぶ。

AV業界が幼女虐待という外傷のEmergency Asylumの役割を果たしたケースがあるからといって、それはAV業界の存在を是認することとは無縁である。また

国際日本文化研究センター研究員  
総合研究大学院大学助教授  
稲賀繁美